飯能市消費者団体連絡会会報

NO.18

まっぺして

平成17年3月25日発行

事務局　飯能市商工観光課内
☎973-2111 内線 197

所沢地区消費生活地域講演会の報告

「消費者被害を未然に防ぐために」

2005年2月16日　於飯能市民会館

2月16日飯能市民会館小ホールにて弁護士長田淳氏を迎え「消費者被害を未然に防ぐために」と題する講演が行われました。当日は雪まじりのあいにくの天気であったにもかかわらず数多くの方が聴講されていました。それだけ消費者被害が身近な問題となっているのでしょう。「オレオレ詐欺」、「振り込め詐欺」などテレビのニュースでも頻繁に取上げられているにもかかわらず被害にあう人が後を絶たないのはどうしてでしょう。

埼玉県消費生活支援センターに寄せられた被害相談は、平成14年度に46、229件であったものが平成15年度には77、373件と急増しています。しかも増加したほとんどが架空請求やヤミ金融の類いの相談ということでした。身に覚えのない不当な請求にもかかわらず支払いをしてしまうのは相手の手にまんまと乗せられてしまっているのです。相手はこちら側の反応をみているのです。例えばいかにも裁判所からきた通知のようにみえるものもあります。最初はそんなに高い金額ではないと支払ってしまうことが多くあるということでした。ところが相手側にしてみれば、これはだまし易い相手だと考えて、次から次へと違う業者の請求がやってくることになると云うわけです。

また携帯やパソコンのメールに突然請求の文章が送られてくることもあるかも知れませんが、相手は返信してくるのを待っているのです。講演者の長田さんが云われるには、このような場合に一番良いのは無視することです。一度返信をすると相手は手を代え品を代え次から次へと仕掛けきます。傍から客観的に見ていると「また、何で」と思えるようなことが、当事者になるとすべてが見えなくなるものです。

消費者には断る権利もあるのです。皆さん、賢い消費者になりましょう。自衛することが一番大切です。もしすこしでもおかしいと思えることがあれば、お近くの相談窓口で相談してみましょう。

□ 埼玉県消費生活支援センター（川越）
049-247-0888

□ 埼玉弁護士会川越支部相談センター
049-225-4279

□ 飯能市役所消費生活相談
042-973-2111
内線　123／191
月・火・水　10時～16時

□ 各市町村消費生活相談窓口

飯能市消団連の「食生活見学会」に参加して

飯能市消団連会員、MOA会員　長谷川　志保子

飯能市消団連では平成8年「飯能の飲み水を考える」の「水の学習会」として、神泉水（カミイズミスイ）の湧き出る神泉村を見学しましたが、平成16年12月8日に再び「食生活見学会」として同村を訪問することが出来ました。

岡田茂吉の思想、哲学に共鳴するボランティア団体MOA（モキチ・オカダ インターナショナル アソシエーション）では現在三大事業として、①芸術活動（お茶、お花を含む）、②自然農法（無化学肥料・無農薬栽培）、③岡田式浄化療法（品川に療院を設立）を行って、全国各地で健康増進セミナーを開催していくことを努力目標にしておりますが、今回見学させて頂きました神泉村の醤油、味噌、トーフの工場『ヤマキ醸造』とその直販店『豆庵』の、社長さんや社員も古くからのMOAの会員です。（今や神泉村の村長さんもMOAに入会されています。）『ヤマキ醸造』は国内産無農薬大豆100％で無添加のトーフ、醤油、味噌造りをテーマに営業をされている、いわゆる環境にやさしい生産者さんです。

現在、国の方針で遺伝子組換えの大豆が国内産大豆にも混入されており、安心、安全をめざす良心的なトーフ屋さんが生き残るのはなかなか困難な時代となっていますが（トーフ屋さんに限りませんが）、村ぐるみの、そして彩の国やMOAなどの消費者団体の応援を得て1990年から操業を続けられています。

今回の見学会ではMOA自然農法で作った七分搗き米を農家さんから届けて頂き、総ヒノキ作りの『冬桜の宿』で、市の職員さん、森林インストラクター、ドライバーさんともども、昼食をおいしく頂くことが出来ました。感謝しております。

長い人類の歴史の中で、地球上では様々な災害と紛争が続いており、自然環境の破壊と汚染が深刻化しています。諸資源とエネルギーを、結果的には消して費やす存在の消費者である私たちではありますが、日々の暮らし方を見つめて、ひとつひとつ改めていく心掛けが大事であると思う次第です。参加なさった皆様も安心、安全な社会の実現に、出来ることから取り組んでいって下さい。子供たちの命、動植物の命を守り続けたいものです。

またお会いしましょう。

消団連の映画上映会

「たべる、たがやす、たべる、はぐくむ ー食農保育の実践ー」

飯能市総合福祉センターにて

3月12日（土）総合福祉センターにて記録映画「たべる、たがやす、そだてる、はぐくむ ー食農保育の実践ー」の上映会を行い、みんなで見ました。

食農保育とは読んで字のごとく命ある食べもの、農作物を育てることを通して子どもたち自身の命がはぐくまれていく保育である様です。

食農保育を始める前の保育園は映像で見ても、どこにでもある普通の保育園でした。

1997年赴任してきた2人の保育士はコンクリートのように固い平らな園庭をみて、「これは子どもたちの生活する場所じゃないな。」と思ったそうです。そして園庭をガッ、ガッと掘り起こし、子どもたちのクラスの目の前に畑や田んぼが生まれます。園庭も決して広くなく、田んぼも本当に小さなものです。

最初はおずおずと土に触れていた子どもたちが体中どろんこになり嬉嬉としている姿。

そして小さな手で田植え。田んぼの稲はすくすく育ち、台風の時にはみんなで心配します。秋の収穫には3～4才児はハサミで、5才児は鎌で稲刈りをします。

収穫したお米は天日干しのあと、子どもたちの手でしごいて脱穀し、杵でついて玄米にします。近くの精米所で精米してもらい、大きなお釜で炊いて保育園のみんなでおにぎりにしてほおばります。お釜にこびり付いた米粒をていねいにつまんでは食べる子どもたち。

脱穀したあとの稲わらは木槌でたたいて、縄をよります。園の用務員さんがわらじを作って見せてくれます。縄は干し柿をつるすのにも使います。ひと昔前の農家のくらしを子どもたちは体験します。再現して見せてくれていると言ってもいいでしょう。自己流で縄をなっている時の子どもの真剣な顔。こういう体験を通して人間は生きていく力を身につけていくのだと気づかされます。

米の他にピーナッツ、ピーマン、すいか、大根など子どもたちの手で植え、育て、収穫しみんなで食べます。

50分の上映時間は時々笑いがこぼれる楽しい時間でした。

上映後、参加者の感想を述べ合いました。

○ 保育園の保母や幼稚園の先生をしている方が5名もおられて、規模は小さくても同じ様な実践をしている園もあり、共感の言葉と同時に実践の難しさも訴えられました。

○ 「市内の幼稚園に居た時、近くの畑を借り野菜を作ったが、たまに見に行く程度だった。毎日目の前で観察できることはすばらしいと思う。」

○ 「園のそばのブドウ畑で体験をさせてもらっている。」

○ 「孫がいる。うらやましい。子育て中のお母さんだけでなく、大人みんなのこうした目線が必要。」

○ 「楽しみに来て、楽しかった。すばらしいと思ったのは地域とのよい関係が築けていること。先生方の努力はすごいと思う。」

○ 「保育士さんがいい顔をしている。」

○ 「子どもがどろんこになっても笑って見られる広い心を持ちたい。自分の子どもの頃と同じ事をさせてあげられてないなと思う。」（若いお母さん）

○ 「この子どもたちは本物のおいしさを知っている。将来、心強い消費者になってくれるのでは。」

○ 「いい映像を残してくださった。共感しあえるスタッフが集まっている集団だからこそ出来ること。存続させたい。」

○ 「今60才。4年前まで都立高校の教員をしていた。ずっと普通高校にいて荒れた高校生たちを見てきた。最後の2年間は農業高校にいた。そこの子どもたちはやさしかった。何故だろうと思った。学校でも体験学習というのをしているが、この保育園の子どもたちの体験はもっと根元的なことのように思える。」

○ 「楽しい映画でした。子どもが大根の苗を植えたあと、保育士が植え直したのかなーと気になっていたが収穫した大根を見て、あのままだったんだと思った。（皆笑い）友人のお子さんが保育士をしているが、やればやるほど大変で自分の子どもを持つことも難しい現状がある。」

○ 「自然が育ててくれるもの、長い期間を通して育つ様子を見て確かめられることの大切さ。最初の園長さんが『ここは子どもの育つ場所ではない』と感じたことがすごい。子どもが育つ環境の大切さを改めて思う。」

○ 「食農教育が公の教育の場にあればいいが、なければ身の回りのできるところで体験するといい。子どもが小さい時自分のために畑を借り、子どもは周りで遊ばせておいた。子どもは素手でハヤを捕まえられるようになり、東京の友達が遊びに来た時、山の栗を焼いて食べさせたりしていた。」

○ 「久しぶりに小さい子をずーっと見て大変おもしろかった。0～1才児が年長児のしていることをじーっと本当に一生懸命見るんですね。そして学んでいくんですね。お釜の焦げをあんなに夢中で食べられるのがうらやましい。」

○ 「身近に子どもが少なくなった。子どもの声を聞かなくなった。日本の将来はどうなるのか心配。この映画では子どもの自然な笑顔が見られ、子どもの自然な言葉が聞けた。このような環境の中で子どもが育てられれば子どもの数も増えるのでは。」

制作者の小林さん、大木さんは、

○ 「映画に出てくる保育士さんは五年目位、自ら泥だらけになって遊ぶ、大変たくましい。ここは保育士さんも育っていく場なんだなとおもう。実際の保育園を見たら狭いと思うでしょう。上映会に呼ばれていった地方の市は緑に溢れた抜群の環境でした。・・・ですからこれは人の問題です。」

○ 「保健所の所長さんがとても感動してくれた。食育をしていく時、保育園の中だけでやるのは無理。食育ボランティアの協力を得たり、ネットワークで伝え合いながらといろんなやり方がある。」

と話されました。

○ 「ケガはないですか?」の質問に「小さなケガはあるが、大きなケガはない。保育士さんはよく観察している。オロオロしない。小さいケガの時は「なめておいて」という。鎌を使うまでに小さい時から少しずつ訓練しているからケガはない。」

とにかく、子どもたちの表情が生き生きとしていて、こんな保育園や幼稚園がいっぱいできたらいいなーという思いは映画をみた人共通の思いでした。

これから子育てをする若い人はもちろん、教育に携わる人、行政の人にもぜひ観てもらいたい映画です。ちなみに制作者の大木さん、小林さんは最近飯能市の住民になられたので申し込めば身近で上映会を行うことも可能です。

◇ 大木さん、小林さんの連絡先
TEL／FAX
973-5502